

## 台湾ランニング事情第7回

## 第15回舒跑杯(スーパオ杯)

石原忠浩(台湾・政治大学日本研究プログラム 助理教授)  
(元(財)交流協会台北事務所専門調査員)

台湾の春夏秋冬は短く、夏だけがひたすら長い。台湾での経験上、台湾でのフルマラソンのシーズンは12月から3月までと定義し、4月から6月までの時期のレースも8時前に完走する時間帯のレースしか出場しないようにしている。その「前提条件」に適い、エントリー費100元というコスト・パフォーマンスの高さを誇るレースである「舒跑杯」(スーパオ杯)に出場した。

## 1. 大会の歴史沿革と概要

「舒跑」とは、1956年に成立した台湾の大手食品会社の維他露食品が販売するスポーツドリンクのブランド名である。同社のホームページによると創業者が1981年当時の台湾当局がスポーツの振興を大きく掲げたことで、スポーツが流行し、新たな市場が生まれるとの予見をし、台湾人向けのスポーツドリンクである「舒跑」を開発、販売したところ、同飲料はヒット商品となり、同社の発展に寄与したとの説明がなされている。

「舒跑」のブランドを用いたロードレースの開催も、同飲料発売後の翌年1982年に本社のある台中で第1回レースが開催されている。台中における舒跑杯は、昨年11月まで35回開催され、参加者3万人という有数の規模を誇る。歴史のあるロードレースとなっている。舒跑杯は今世紀に入り、2002年以降は台北市で、2015年以降は高雄市でも開催され、台湾の北中南部を代表する三都市で開催される一定の知名度を有する人気レースに定着している。

表1は、ランニングレース関連のサイトなどから、整理した最も間近に開催された台北、台中、高雄の舒跑杯の概要をまとめたものである。

台湾北中南部の中心都市で開催される同レースは、例年台北で5月、高雄で10月、台中で11月に開催され、いずれのレースでもシリアスランナー?もエントリーする10キロ前後のレースとFun Run的な3キロレースの二本立てになっている。距離が台北で12.5K、高雄が9.7Kというのは中途半端ではあるが、同レースは電子チップを使用しないレースのため、スタート地点或いはゴール地点を移動させ、10Kなど区切りの良い距



スタート直前の様子

表1 舒跑杯の概要

	台中舒跑杯	台北舒跑杯	高雄舒跑杯
最近のレース	2016年11月13日	2017年5月14日	2016年10月16日
種目、制限時間、参加人数	9K(90分 12000人) 3K(50分 18000人)	12.5K(120分 8000人) 3K(30分 12000人)	9.7K(90分 7000人) 3K(30分 8000人)
エントリー費	100元	100元	100元

離に合わせることをしていないのかもしれない。この辺の大雑把なところも台湾らしいと言えるのでしょうか。

このレースで特筆すべきなのは、冒頭でも紹介したエントリー費の安さにある。日本のレースとは比べるまでもないが、ここ数年は毎年のようにエントリー費が値上がりしている感のある台湾のロードレースの中でも依然として格安のカテゴリーに入るレースである。100元(約360円)という価格は我々、台湾庶民が昼食時に食べる弁当が60～80元ということを勘案すれば、日本的感覚では1000円くらいではないだろうか。この費用で写真のように、ドライ素材のランニングシャツとタオル(十分に使用に耐える物)、600ccのスポーツドリンクが付いてくる。また、レース後には自ら容器を準備し好きなだけスーパーオが汲めるお持ち帰り自由のサービス(宣伝?)もある(写真参考)。そのような気楽さもあり、筆者も練習気分と刺激も兼ねて今回で3年連続の出場となった。



参加商品

コースは、昨年以前の大会では、台北市政府を出発し、仁愛路を西方向、総統府方面に向かい、中山南路で折り返す往復コース(9K)が利用されていたが、今年から変更となった。今年のレースでは、台北市内で度々使用されるコースではあるが、総統府前のケダガラン通り(凱達格蘭大道)を出発し、中山南路を横切り仁愛路に入り台北市

政府方面に進み、金山南路で左折、しばらく進み「新生高架橋」という自動車専用道路に入り、北上し、淡水河を越え、圓山飯店を右に眺めつつ、士林夜市に近い劍潭で高架橋を降りきったところで折り返し、同じ路を戻る往復コースである。このコースの良い所は、全線完全に交通規制がなされている点である。

なお、本レースは台湾のロードレースで定番となっている上位入賞者への賞金は無く、男女各20位までは記念品と入賞の盾のようなものが贈呈されている。いずれにしろ、無賞金レースということで「賞金狙い」のケニア勢の姿は皆無であった。

## 2. 当日のレースの状況

6時スタートのレースの場合、6時に動き出す地下鉄を利用しては間に合わないため、ほとんどの参加者がタクシー、バイク、レンタサイクル(U-Bike)を利用する。筆者の当日は4時起床、軽食をすませ、5時にタクシーに乗車し、15分で現地到着。すぐに荷物を預けトイレも済ませ、30分前にはスタート現場に向かう。整理スタートではないため、前の方の好位置を確保するには早い者勝ちとなる。総統府をバックに三々五々と参加者が眠そうな顔をしながらも集まり、今レースの「2017 舒跑杯」のランニングシャツを誇らしげに着用し(台湾のレースでは参加者の半数以上が主



ペーサー 2

催者提供のシャツを着用している感じがする)、スーパオの看板やキャラクターと記念写真撮影に興じる人々で溢れかえっている。

スタート地点には黒字のランニングシャツに「Pacer」とかかれたシャツに「1時間」、「1時間8分」、「1時間15分」というゼッケンをつけた集団が出現していた。ペーサー（配速員）である。その中に、政治大学の運動会のトラックレースで競ったことのある知人を見つけ、雑談。同人は、昨年ベルリンでSub3を達成したエリートランナーだが、最近の台北市内のレースではペーサーのお手伝いもしているとのことだったが、今回の件は「急に声がかかった」とのこと。確かに、ペーサーのことは事前の大会要項には載っていなかった。しかし、そのSub3氏は最速ペースの「50分」(1キロ4分ペース)ゼッケンをつけており、小生が目安としていた55分(1キロ4分半)と比べると明らかに速すぎ、またその次のカテゴリーは1時間(1キロ5分弱)と少し遅いことから、ペーサーについていくことを諦め、スタートラインに立った。

当日のスタート時の気温は24度。6時前だと日影も多く、体を動かさない限り暑さは感じないが、レース後半の6時半以降は日差しも徐々に強くなり、体感温度は相当あがり、大量の汗をかくはずである。幸いにも、6キロと10キロ地点に2か所の給水所が設けられているとの告知があり、水不足の心配はなさそうである。



高架橋を走行中 右前方に圓山飯店をうかがう

どうにか10列目くらいの好位置を確保したが、1キロ4分ペースの集団について行かないように自重を心がけつつも慎重になりすぎないようにスタート。4分30秒のペースを心がけて1キロを通過すると、ようやくペースも落ち着いてくる。ここで、自分のペースメーカーになりそうなランナーを探し始める。ここでの最大のポイントは、経験豊富そうな年配の男性ランナーである。特に風貌としては、後ろから見て安定したフォーム、くたびれたシャツや帽子の着用者が最高の標的となる。なぜなら、彼らは決してオーバーペースにならず、一定のペースで走ることに長けているからである(と私は思っている)。今レースでもなるべく「独走」を避け、ベテランランナーに追従することを心がける。5キロは想定通りの22分26秒で通過し、携帯電話を取り出し撮影する余裕を持って走る。淡水河を渡り、圓山飯店を超えると劍潭の折り返し地点となる。この後の給水では、少し咽たりしたが大事には至らず。太陽も高くなってきたが、刺すような暑さではない。10キロも45分23秒でと想定に近いタイムで通過、高架橋を降りてからのラスト2キロの終盤は、仁愛路に戻り、3KのFun Run参加者と並走するようになるが、コースは分かれており、大混雑に巻き込まれることはなかった。ラストスパートこそかからなかったが、大きな失速をすることもなく、全ての区間で1キロのラップを4分40秒以内でまとめ、55分7秒でゴールできた。

昨年9月に同じコースをほぼ同様の気象条件の中で走ったが、記録が90秒も「進歩」したのは、嬉しい誤算であった。昨シーズンは、2011年にフルマラソンを目標に練習を始めて以来、初めてフルマラソンのベスト記録を更新できなかった悔しい停滞の年であったが、その反省?もふまえ3月以降は、30K走を練習で取り入れた成果ができたものと思いたい。





記念撮影に興じる参加者

### 3. ゴール後の雑感

ゴール後は、総統府前の広場で、記念品のタオル、飲料と荷物を受け取り、木陰で簡単な着換えを済ませ、少しだけの達成感に浸った後、上位入賞者の表彰式を遠目に見る。そして、帰り際にスーパーオ飲み放題の列に並び、一部の猛者が、5Lのペットボトルを持ち込み、「戦利品」として持ち

帰る姿に苦笑しつつも、筆者は控えめに350CC入りのボトルにスーパーオを汲み帰路についた。

本レースは、格安エントリー費用、交通規制された市街地レースという魅力があり、今後も出場したいレースである。しかし、あえて改善点を提言するのであれば、エントリー費が100～200元高くてもいいので自分の全体的な立ち位置を知るためにもチップの導入を採用してほしい。また、ペーサーを配置するなら、エリートランナー（キロ4分）と一般ランナー？（キロ5分）の間のカテゴリ（自分のような4分半ペース）にもペーサーをつけてほしいというのは、贅沢な望みだろうか。



スーパーオが汲み放題